

## 心の旅「鎮魂と平和」

### [1] 唐丹小中学生の姿勢から学んだこと

高舘 千枝子

3月、新型コロナウイルス蔓延防止対策で全国学校休校要請が出て、まじかに迫っていた卒業式は縮小され、春の運動会は秋に延期、修学旅行もなくなり、9年前、東日本大震災に苦しめられた苦痛にも似た不安が押し寄せ、一切の交流が絶たれてしまいました。東日本大震災は世界中の支援に支えられながら復興に邁進することができましたが、今回のコロナ禍は、世界規模の感染症で治療薬もワクチンもなく、世界の動きが止まったかのようにになりました。震災直後にこのコロナ禍が起きたら…と、想像するだけでゾッとします。改めて平和の尊さをかみしめています。

幸い、岩手県内には感染者は出ていません。やっと、震災から立ち直りかけ、本格的な町づくりに取り掛かる途上にやってきたコロナ。多くの県民は「コロナなどに負けてはいられない」という思いが沸き、「自分がコロナ第一感染者になったらこれまでの復興の努力が水の泡になってしまう」という気持ちになったのです。東日本大震災の復興に向かって歩み出してから10年目を迎え、やっと先が見え始めた矢先、今度は新型コロナウイルスの全世界への蔓延。「あの時に比べたら、ちょっとの我慢に過ぎない」と言い聞かせ、今は、行きたい所、会いたい人、見たいもの…限らない私欲を抑える時。コロナに「地球の真の生き方」を試されているのだと思います。

この3ヶ月、季節の移ろいを楽しみながら、9年の活動を振り返る良い機会となりました。私にとって、震災前の釜石は大槌町の親戚に行くため、車で通り過ぎるだけの街にすぎませんでした。唐丹小中学校との9年間の交流で「鎮魂と平和」を、掘り下げて考える貴重な経験として心に深く残ります。

“鎮魂の歌 巡礼の旅（2016－2018）”で、「鎮魂の歌」と共にハソウを吹き鳴らし始めた頃、タイミングを合わせたかのように、学習発表会（2016年10月22日）で小学校5、6年生が劇「かわいそうなぞう」を発表しました。物語は、第二次世界大戦後半 戦況悪化で東京が空襲に遭う前に、殺傷処分されることになった像の話です。戦争を知らない子供たちが、長いセリフを覚え、全身で演技する姿は、会場に涙と感動の渦を巻き起こしました。この演技を通し、子供たちに平和の尊さを伝える学校の思いが見え、指導に当たった先生たちの意気込みと熱心に取り組んだ子供たちの演技に感動し、いつまでも大きな拍手と感謝の声が鳴り響いていました。

釜石は、1945年（昭和20年）7月14日と8月9日の2度に亘る英連邦艦砲射撃を受け、町は壊滅的被害を受け死者も多数出ました。この史実を後世へ伝えるため釜石教育委員会では教本「釜石の歴史」を制作し、授業に取り入れていることも知りました。艦砲射撃と時折襲ってくる

津波で、破壊と復興を何度も繰り返して歴史を刻んできた釜石。しだいに釜石への思いが深まり、坂口憲一郎さんが世界平和を願って吹き続けてきた「鎮魂と平和の笛壺ハソウ」を唐丹の子供たちへ贈り始めたのは1917年3月の事でした。

演劇発表を通して平和教育の学校の取り組みとハソウへ込められた「鎮魂と平和への思い」は、唐丹希望基金の子供たちと釜石へ寄せる思いとなったことは自然な流れでした。

3月以降、コロナ禍で突然絶たれてしまった交流ですが、9年間培ってきた友情と信頼の絆は途切れる事はありません。津波であれ、コロナであれ、自然災難は突然やってきて、その度に私たちに長い忍耐を迫ります。「どんな困難に遭っても前向きに生きる人間でありたい！」と心を強くしてくれるのも、気持ちを奮い立たせ、復興に向かう覚悟を持った時に与えられる尊い思いです。釜石は「戦争」「津波」「復興」「鎮魂と平和の願いと祈り」を歴史の中で何度も繰り返しながら歩んできましたが、今回のコロナ禍もその本気さを試されている気がしてなりません。

釜石市は毎年、7月14日と8月9日の早朝、艦砲射撃戦没者へ追悼のサイレンを鳴らし、市民は黙祷を捧げ、「鎮魂と平和」の思いを深めていることを知りました。私は、津波と戦時中に受けた艦砲射撃で死んでいった人たちの心の叫びに耳を傾け、釜石の空気に触れたいと思い、7月13日～14日に釜石の訪問を計画しました。私の「鎮魂と平和」の心の旅の始まりです。

#### ◆皆様から「鎮魂と平和の思い」の投稿を募集します。

唐丹の子供たちに伝えたい「平和と鎮魂への思い」を、皆さんの人生経験の中から、語り継ぎたいエピソードを交えて投稿頂きたいと思えます。EEC通信に掲載しホームページを通して多くの人たちと共有し、学びあい、考え、心を磨く糧にしたいと思えます。お待ちしております。

### 「最も楽しい事業」

人の世になによりも楽しいものは仕事である、張り合いのあるものは仕事である。もしも、私たちにすることが与えられていなかったら、毎日どんなにつまらないものだろう。

その楽しい仕事のなかでも、多くの愛らしい赤ん坊が、よい子供に、よい大人に育っていこうとする仕事を、手伝ってやる仕事ほど、楽しい仕事はないだろう。

自分の手の中にある赤ん坊ばかりでなく、わが子、他人の子、世界中の揺籃を考えてみよう。そこに人生の青田がある。私たちはその農夫である。なんという大きな事業であろう。なんという楽しい仕事であろう。

そこに虫の害があるではないか。<sup>かんぼつ</sup>旱魃があるではないか。洪水があるではないか。大風があるではないかとある人は言うだろう。自然を相手の仕事は、一面じつに正直であり、一面じつに冒険である。

人の生<sup>いのち</sup>も大いなる自然物である。よい種をまいてよく育てたら、法則にしたがって時も違えず美しく伸びてゆくはずである。しかし古往今来・・・・

羽仁もと子選集「おさなごを発見せよ」より抜粋